

発達と教育



牛島義友

バランスのとれた教育を精神発達の面や学校の教育制度について考えてみようと思う。

精神発達のみにみると三歳以前の年少幼児では愛情としつけとのバランスがとれていることが大切である。愛情の本質は子どもにさわることである。精神的愛情の上になつてさわるのが愛情の中心である。アメリカの心理学者の実験に代用の母親を与えたサルの子の成長についてのものがある。一方の親ザルをさわった感じの柔かいぬいぐるみでつくり他方をかたいはりかねでつくった。そして両方ともお乳の出るようになった。だんだんやっていくうちにぬいぐるみの親ザルを子ザルはしたうようになった。こわいものが、やってきた時にもすがりつくようになったのである。しかしはりかねの方に

水道ぐらいの価値しかおいていない。これで親子のつながりがさわってやわらかいという触覚を通してでき上ることがわかる。しかし生みの親が子どもを抱くことが大切なのかどうかはわからない。養い親でも心から大切にしていればなつくのである（生母が必要となるのは七、八歳以後である）。三歳以前では愛ぶる行動（mothering）をよくしてくる人にはだれにでもなつくしこの時代の保育にはこのことが一番大切である。もう一つ大切なのはしつけである。基本的習慣（食べる、排泄、清潔、一人寝）のしつけがこの時代には大切である。やり方としては同じことを例外なくくり返すのがよいのである。このころ teaching machine がはやるがこれは動物心理の方面から考えられたことである。動物には普通弁別学

習をさせる。スキナという人がきかいたにやれる自動装置を考え
た。間違つた方へ行くと電気ショックが与えられ正しい方へ行くと
目標物へ到達できる(スキナホックス)。それと同じ方法でまちがっ
た答の時は何回もやり直させるといふやり方をするのが teaching
machine である。基礎になつてゐるのは条件反射の理論である
「さわる」といふ愛情と条件反射的しつけとは正反対のものであり
この二つが対立してゐる。精神分析派は愛情を重んじ学習理論派の
方はしつけを重んじる。しかし実際は二者のバランスのとれてゐる
ことが大切である。弱々しい子どもなどには親の愛情が過ぎて過保
護になり一人では何もできないということになつてしまふ。だから
これが精薄の子どもの親に共通の悩みとなつてゐる。ただ「ほん
」と言へば母親が口に入れてくれるといふふうに育つた子どもはま
た、母親の髪を毛をひっぱつてでも自分の意志は何とか通そうとす
るものである。母親は子どもがかわいそうなのでたまつてがまんし
てゐると、ますます横柄になつたりする。そういう子を施設に入れた
りすると先生はしつけを重んじ機械的に育てようとする。すると自
分のことは自分でできるようになり楽しそうに遊ぶようになる。や
はり愛情だけでは育てきれない。他人にお願ひして良い意味での冷
たい態度をとつてもらひ、しつけてもらふ必要がある。しかしまた、

しつけだけをやってゐたのではだめである。乳児院などで専門家の
医師や看護婦がいて衛生的にも時間的にもきちんとやつていても子
どもたちの発育かうまくゆかぬ場合が多い。栄養も十分とつてゐる
のに身長がのびないずんぐり型になる。しかしいなかの子と比べて
体力がない。いろいろの能力検査でも低く知能テストでも70位にな
り表情かない。おこつたり笑つたりしなくなる(こういう現象をホ
スピタリマムという)。愛情たけでもいけないししつけだけでもいけ
ない。親の愛情というものは触覚的であり独占的である。母親は自
分の子どもにだけ自分の愛情をかけてゐる。だからこそ子どもは自
分の母に心のよりどころを求めてゆくのだ。親と子が互いに独占的
愛情をかわしてゐる。これが親子の關係である。この独占的關係が乳
児院などでも必要であるのに平等にかわいがらうという公平の愛情
によつて保母さんに育てられている。教育的愛情という平等な愛た
けでは小さな子どもは育たない。乳児院で必要なことは母を一人じ
めできたといふ満足感をもたせることである。すへての子どもに独
占的愛情をそそがなければならぬ。即ちすへての子どもが公平に
偏愛をうけなければならぬのである。どの子ども自分が一番愛され
てゐるといふ印象を持つことができるようにすることである。たと
えはおつかいに子どもを三人つれていったとする。子どもは母の手

を奪い合つて、誰も満足することができない。人だけつれて行けばその子はその日はお母さんを独占できたという喜びをもてるわけである。翌日は次の子を一人連れていくとすれば、公平に偏愛することになる。

四歳頃の基本的欲求は性欲や愛情よりも社会的力に対する要求が主となる。男女児の性意識についていえば、男は強く女は弱いということがこの時期に印象づけられる。それで反対に男児にまけるものかという意識が女児にも出て来る。また三歳以前のように主としておとなとばかり接している時には自己中心的な考え方になるが、同じ年頃の子とも遊んでみると自分の自由にならない対手と向き合うこととなり、初めてほんとの意味での社会的交渉が始まる。この頃の社会的欲求として三つある。① 所属への欲求——仲間はすれされるのがいやだ。仲間になりたい。② 承認への欲求——集団の中で自分に一定の役割が与えられ自分の個性が尊重されたい。③ 仲間の中で支配権をもち仲間の賞讃をうける。

これらの欲求が友たちと遊ぶことによつて身につけたり、或いはその欲求が充たされないと劣等感を感じてくる。社会的適応と強い個性ができることが両立しなければならない。両者のバランスがとれていることが必要である。

☆ パーソナリティと適応

パーソナリティの語源はヘルソナでありこれは「面」（役割によつてちがう）という意味である。人牛とはいろいろな面をかぶることを学ぶものたといわれる。おん坊はよそいきの面はかぶれないが学習によつてそれらが獲得される。学校に行った子どもは生徒としての面をつけ社会に出ると職場に応じた面をつける。職場では教師として家では父親としての面をつけねはならない。場合に応じて適当な面を使いわけることのできる人が良くてきた人、よいパーソナリティの人といわれる。場合によつて人間が変つてくるのが適応である。しかしこれではその場その場で動く自信のない人ができてしまう場合が多い。characterの語源にはギリシャ語で「自分の所在地を区別するためのぼうくいにつける印」をいう意味がある。そうである。即ちきざみつけたもの、刻印されたものというのが「性格」の第一の意味である。性格とは生まれながらにそなわつていて形成されるものを意味する。次に、一回きざみつけられたら終生かわらない、とれないものである。一生変らない、というのが性格者

の第二の特徴である。これが適応とちがうところである。情勢がどんなになっても終始一貫していることが性格者にとって大切な条件である。第三にそれは立派なことから一貫していなければならない。信仰、思想において高い価値をもつものでなければならぬ。次にこういう性格者は社会にうけられない不適応者、世間から誤解され非難されることもある。しかしそういう人こそ人煩の教師、先覚者である。ソクラテス、キリストなどは適応者でなく性格者であった。幼児においても適応者ばかりを作っていたら先覚者、次の時代をつくる人など出てこない。社会的適応以外に強い個性のある人間に育てることが大切である。日本人は個性が弱いということが多い。仲間はずれにされたくないという欲求が強い。イヤリヤにいたい、仲間はずれにされたくないという欲求が強い。イヤリヤの幼児は一人遊びが多く、一人で充実した遊びをしている。日本では社会性をつけることが幼児教育の中心問題と考えられ一人遊びをする子は傍観者として問題視される。イギリスの人はおのが道を行くという個性的反応をするが日本人は所属への要求が強く、人ひとり個性的には行動できない。この「適応」と「個性」とのバランスがとれていることが非常に重要なことである。

☆ 社会的適応と個性

いろいろな問題行動の原因には要求不満がある。しかし要求不満を起さぬようにすればそれによいというわけにはいかない。子どもの要求には社会生活をして行く上からみとめてくれないものが多いからである。個性教育は子どものやりたい事をやらせておいたので成立しない。ある意味で欲望をおさえつけたりするものが教育である。しかしあまりにも禁止や抑圧が多すぎると神経症になる。要は少し位の要求不満には堪えられるように教育することが必要である。忍耐力を育てるのが教育の目標であるとも言える。しかし昔のようながまんのためのがまんではない。強制的にはなく自発的にがまんする指導が大切である。高い欲望を満たすために低い欲望はがまんする指導がよい。高い頂上まで登るために現在の一步一步の苦しみに堪えるような形で要求不満にたえる力を養うのがよい。

抑圧か自分の生活にあり、そのために生活が緊張してくることはよくないと考えられるがそうではない。緊張があることは苦しいがそれか個性を作るのによい影響を与える場合もある。貧困家庭、母子家庭など生活が緊張してくるとその家庭の空気が子どもにも伝わ

ってくる。母の緊張した態度が子どもにも伝わり立志篇的な人物も生まれたりする。緊張があった時にはその緊張を利用して生かしていくことが大切である。

☆ 人間の道徳的性格

幼稚園では生活指導というとすぐ「しつけ」を考えがちであるが、それだけでは足りない。日常的生活訓練と共に非常な時における危機的体験、罪の自覚、悔い改めの経験が大切なのである。これは青年期の問題のように考えられるが幼児教育の問題でもある。多くの子どもが六、七歳の頃はじめて道徳的ウソを言うようになる。幼児のウソは実際と空想との未分化から出て来るものであるが、このころはじめて道徳的ウソを言うようになるのである。たとえば、恵まれた環境に育った子どもほど他の子どもの子どものやっているように駄菓子屋などで買い食いしたい欲求が出てくる。それで母の財布からお金を盗んだりお店のものをこっそりもってきたりする。盗みをする子どもは心が急に複雑になる。それまでは、すべての人々にひらかれていた心がとぎされるようになる。秘密をもった人間になり秘密の部屋の中で良心のカシヤクをうける。またそれをかくすため

に次から次と嘘を言う。これに気付いた母は心からショックを受け激しく子どもを叱る。心にやましいものを感じている時に激しくおこられると「もう二度とやるまい」という気になろう。この罰の意識、後悔、悔い改めの経験こそ道徳的人間ができてくるプロセスである。道徳的人間になるためにはこういう悔い改めの経験が大切である。また不幸にして親がこれに気づかなかつたら子どもは良心のやましきを感じつつも結局は「得をした」と思うだろう。この六歳頃の経験は重大な危機的なものである。この一生に一度の歴史的な現象の中で指導は人間形成において非常に重大である。この現象をみつけるのは先生だとむずかしいかもしれないが、親なら母なら、わかる事なのである。親のつとめの重大さが思われる。

次に「しかる」という問題について。

ふつうはしからぬ方がよい。しかしこの場合には心にしみこむしかり方ではなければならない。子どもに「もう二度とあんな事はすまい」という決心をさせ、心の中に道徳的抑圧を植えつけることが大切である。精神分析からは反対されるだろうが、この場合にはこのような道徳的ショックが大切なのである。

☆

☆

(文責在記者)